朝日西遺跡の井戸について

長島　広

1

水は生物の生活の上で最も基本的な物質である。水は人々の生に直結しており、水そのものやそれに付随する施設も人々の日常の信仰の対象となってきた。人々にとって最も水の得やすい川岸は洪水・氾濫などあまり居住に適した場所ではなかったようである。特にここ尾張平野はその背後に３つの主要河川が控え、名古屋台地との境にも２つの１級河川が流れている非常に水源には恵まれ、地下の水脈も豊富な地域である。標高５ｍ以下の微高地上に展開した遺跡群には（特に中・近世を中心として）安定して安全な水源を確保するために数多くの井戸が作られてきた。

今回この小稿で取り上げるのは朝日西遺跡で調査されたものである。全国的にも屈指の規模を誇る弥生期の一大拠点集落遺跡である朝日遺跡を東方に望む朝日西遺跡は木曽川水系の三角洲平野上にのる後背湿地から古墳時代以降に堆積した五条川の自然堤防帯の間に位置する中世から近世にかけてを中心とする時期に盛行した遺跡である。一般国道302号線建設に伴う発掘調査が昭和56年から昭和60年まで約20,000㎡ほど行なわれたこの遺跡は標高4.0ｍ前後にのり11世紀から15世紀にかけてのⅠ期、16世紀から17世紀初頭の大窯期および登窯Ⅰ期までのⅡ期、江戸から幕末にかけてのⅢ期まで綿々と続く(1)。検出された井戸の総数は87基で現代井戸が６基、時期不明のものが４基である。

井戸の研究は古くは鳥居龍蔵(2)に始まり、近年では宇野隆夫(3)によって全国に渡った井戸の集成および形式分類がなされている。その中で宇野氏は井戸の内部構造物に着目して、内部構造物のみの形式分類をすることによって井戸全体の分類の基準としている。また井戸の部分名称(4)を三つに区分し、上から井桁、井戸側、水溜という呼称を用いている。朝日西遺跡およびその周辺の遺跡群での調査例では地上施設である井桁が残存していた事例はない。井壁保護の施設である井戸側と底の施設である水溜との相違が不明瞭であるため、地下に埋設されている構造物は全て内部構造物という呼称を用いるが、内部構造物が２種類ある場合、例えば木枠と曲物のセットなど上部を木枠井戸側、下部を曲物といった呼称を用いる場合もある。この小稿では内部構造物の細かな分類は行わず、遺構として現われた井戸の平面形態と内部構造物をセットとして朝日西遺跡の井戸の様相を検討してみたい。

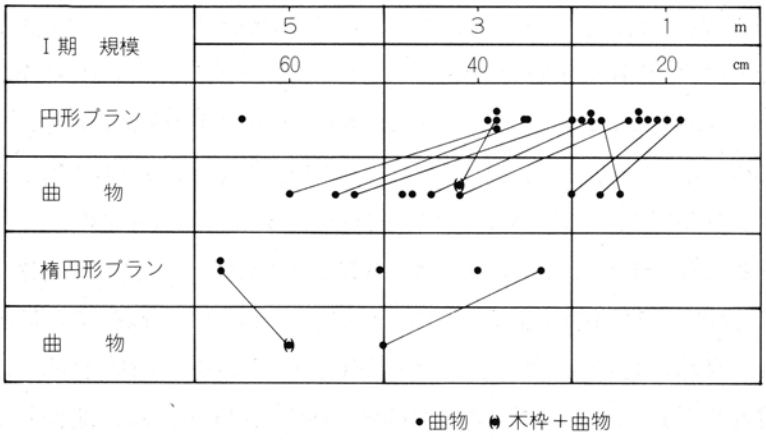
2

ここでは、朝日西遺跡における Ⅰ期とされている時期すなわち瀬戸・美濃の施釉陶器でいう大窯期以前で、灰釉陶器の末期からいわゆる山茶椀を主体とする時期を取扱う。

さて朝日西遺跡のⅠ期の井戸は総計28基で、時期不明及び現代井戸を除いた総数の約36.4％を占める。その内訳は、内部構造物を有するものが19基（約67.9％）、内部構造物がないものが９基（約32.4％）を占める。内部構造物を有するものの中では円形曲物のみが16基（57.1％）と最も多く、方形木組の井戸側と曲物が一対となったものが１基（3.6％）、半裁した竹を縦に並べて方形に組んだ井戸側と曲物が一対になったものが１基（3.6％）検出されている。

また内部構造物のうち曲物を有していた19基のなかで曲物の直径が計測可能なもの14基についてその規模を比較してみると11基が径42cm～60cmの間にあり、47cm～50cmを中心に分布している。残る３基は径25cm～30cmの小型曲物をもつもので平面プランは円形で0.85m～1.68mの掘り肩をもち、深さは検出面から0.40m ～0.46ｍを測り、曲物ばかりでなく井戸そのものも小型で浅い。これらの小型井戸は59Ｂ区に集中してみられ、他にも同じ59Ｂ区で内部構造物が検出されなかったり、曲物の規模が不明であるものの中で円形の平面プランで径が1.0m ～1.3m の小型の掘り肩をもつものが４基存在するのは強ち偶然ではなかろう。

次にⅠ期の井戸の平面プランについてみると、円形のプランを有するものが22基(78.6％)楕円形[5]のプランを持つものが５基（17.9％）、 不明１基（3.6％）で円形プランのものについては60Ｂ区の１基を除いた他のものは径が0.85m ～2.9m 以内に収まり、更に単に規

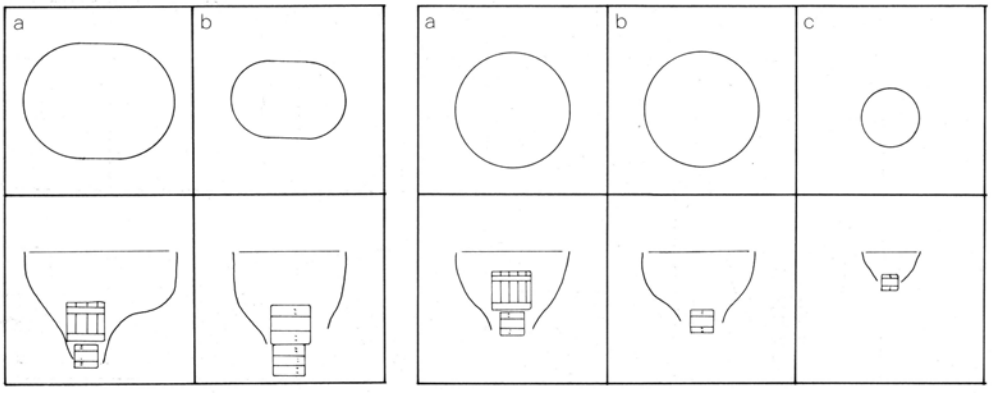


Ⅰ期　井戸規模分布図

模だけでみると0.85m～2.0mまでのもの12基（42.9%）と2.45m～2.9mのもの6基(21.4%）とに区分できる。楕円形のプランを有するⅠ期の井戸は朝日西遺跡の中では最大規模の長軸で5.75mを測る2基（7.1%）と長軸4.05mを測る1基（3.56%）があり、楕円形プランのⅠ期の井戸は概して大型であるといえる。

以上に基づいてⅠ期の井戸の平面形態と内部構造物とを組み合わせたモデルを想定すると次のようになる。Ⅰ類：楕円形の平面プランを有するもの、a．長軸4m以上の大型で木枠井戸側と曲物のセットを持ったもの、b．長軸3m以下の平面プランで曲物積み上げのもの、Ⅱ類：円形の平面プランを有するもの、a．3m径以下の中型平面プランで木枠井戸側と曲物のセットを持つもの、b．3m径以下の中型平面プランで曲物積み上げのもの、c 2m径以下で1m径前後を中心とした小型平面プランを持ち、30cm径以下の小型曲物積み上げのものに分類できる。

Ⅰ期Ⅰ類　　Ⅰ期Ⅱ類

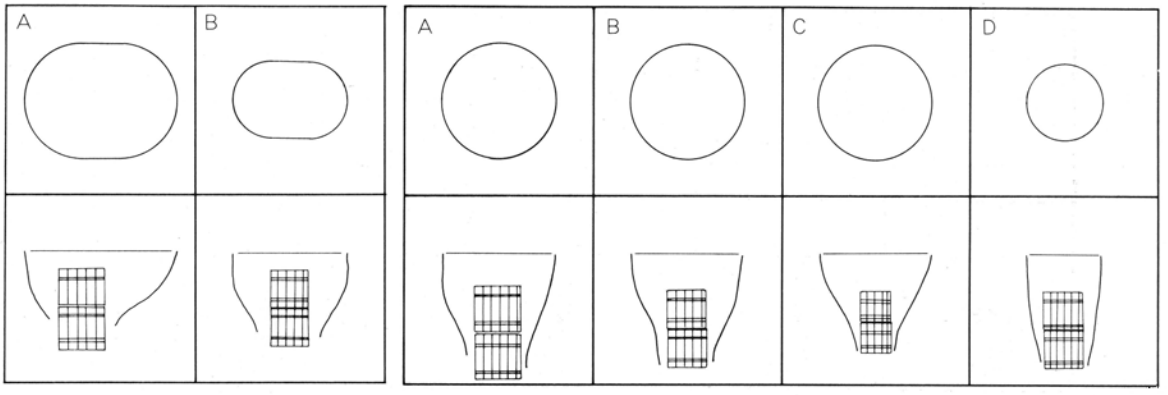


Ⅰ期　井戸モデル分類

Ⅰ期

58				
	05	円	1.9×1.7	
59A				
	14 曲物(38・47)	円	2.5×0.82	
	15 曲物60	円	1.80×1.80	竹の井側(65×67)
	16 曲物45	円	--×0.7	
	17 曲物48	円	--×0.38	
	18	円	2.15×1.98	
	19	円	2.8×1.3	
59B				
	SE01 曲物(小)	円	--×----	
	02	楕円	3.0(2.1)×1.35	
	03 曲物25	円	1.68×0.46	
	05 曲物27	円	0.85×0.45	
	09	円	1.0×0.84	
	10 曲物42	円	2.82×0.51	木組井側(90×95)
	11 曲物42	円	1.4×0.57	
	12 曲物	円	1.1×0.33	
58SK02	曲物45	円	1.8×1.19	
	03 曲物50	楕円	2.35(1.9)×0.75	
	05 曲物	円	1.3×？	
	09 曲物30	円	1.31×0.4	
59C				
	07	円	2.80×1.34	
59D				
	11 曲物	円	1.80×0.37	
59E				
	SE01 曲物55	円	2.45×1.5	
	SK03			
$59E_2$				
	03 (165) pit	楕円	5.75(4.28)×1.59	
	06 53pit	楕円	4.05(2.90)×0.86	
60A				
	04 曲物53	円	2.08×0.66	
60B				
	SE01 曲物60	楕円	5.75(4.00)×2.18	木組井側(1.0×1.0)
	曲物	円	5.55×0.94	

ここでは朝日西遺跡のⅡ期とⅢ期すなわち清洲城下町の時代と朝日の宿場町の時代とを取り上げる。Ⅱ期及びⅢ期として確認された井戸の総数は49基で、全体の56.3%現代及び時期不明のものを除いたうちの63.6%を占める。その中でⅡ期に属するものが44基（現代及び時期不明のものを除いた数＝以下総数の57.1%）Ⅲ期に属するものが５基(総数の5.7%）である。Ⅱ期のもので内部構造物を有するものの内訳は、桶を検出したものが10基（22.7%)、桶を締めるための竹のタガのみを検出したものが７基（15.9%)、下部が桶でその上に桶よりやや小さい方形に組んだ木枠をのせたものが１基（2.3%)、縦に半裁した竹を方形に組んで井戸側にしたものが１基（2.3%)方形に組んだ薄板のみ確認したものが１基(2.3%)である。このうちの桶の規模が確認できた９基の桶を比較してみると、直径が80cm以上のものが３基、60～73cm径のものが４基50～53cm径のものが２基数えられる。またタガのみ検出したものの中でタガの直径が確認できたものが３基あるが、それら



Ⅱ期　井戸モデル分類

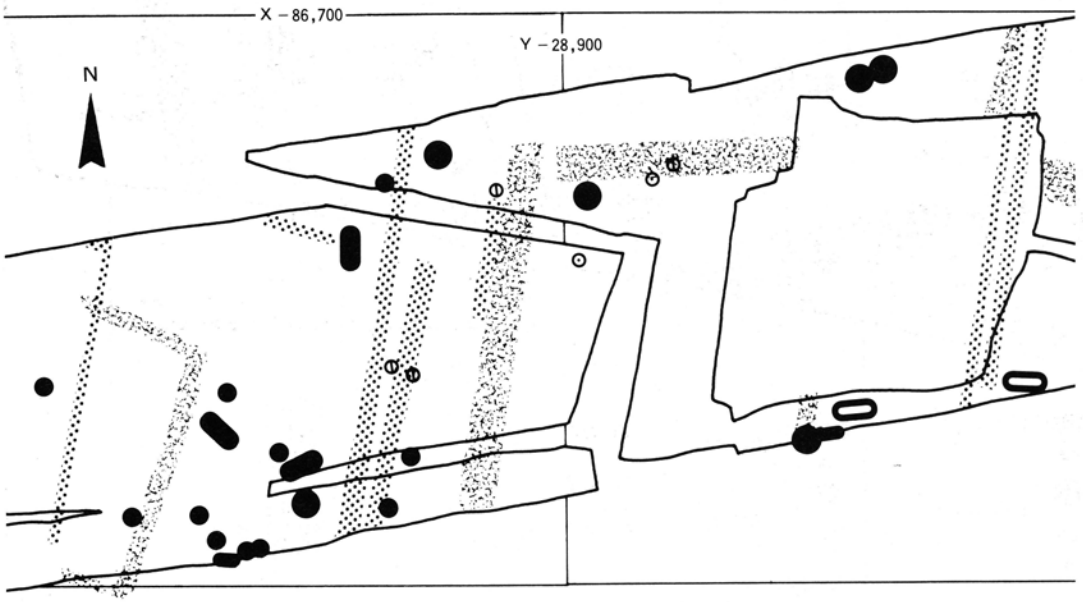
Ⅱ期

57					
	002		円	1.0×1.7	
	004	桶(80)5段	楕円	4.6×3.9	
	005	桶(80)	円	2.6×2.4	
58					
	02	桶(69)(73)	楕円	5.0(3.3)×2.7	
	03		楕円	5.0(3.3)×1.1	
	04		円	3.2×2.2	
	06		円	3.0×0.7	
59A					
	SE13	タガ	円	2.45×0.73	ザル
59B					
	04	桶(50)	円	2.85×2.9	
	06		楕円	1.9(1.6)×0.84	
07	07		円	4.02×0.94	方形半裁竹井側(90×90)
	08		円	1.2×0.72	
59C					
	SK04		円	1.65×0.55	
	05		円	2.90×1.37	
	09		円	2.70×1.20	
	15	タガ	円	1.80×1.19	
	37		楕円	1.30×0.6	ザル
59D					
	SE02		円	- - ×1.36	
	SK04	タガ(65)	円	3.87×1.08	
59E					
	41	タガ	円	3.40×1.06	
	79	桶	円	2.20×1.04	
	80	桶	円		
	57	桶(60)	円	1.65×0.67	木組井側(50×50)
	98	タガ(60)	楕円	2.60(2.20)×1.18	
	100		円	1.30×1.19	
	101		楕円	2.50(1.75)×1.19	
	105		円	2.90×1.52	薄板(1.1×0.85)
	106	タガ	楕円		
$59E_2$					
	SE02	桶(53)	円	3.50×2.38	
	08	(80)pit	円	3.05×1.54	
	09	桶(81)	円	3.65×1.21	
	SK216		楕円	2.70(?)×0.87	
59F					
	SK11		楕円	2.60(2.30)×1.41	
	39	タガ(63)	円	4.20×0.91	
	49	桶(60)	円	3.50×0.87	
59G					
	SE01		円	2.75×0.60	
	03		楕円	4.14×0.44	
	04		円	2.30×1.00	
	06		楕円	2.65×0.85	
	07		楕円	1.96(1.75)×1.05	
	08		円	2.40×1.12	
	09		円	1.85×1.16	
	SK34	桶	円	2.20×1.08	
60A					
	11	桶(60)	円	2.65×0.72	

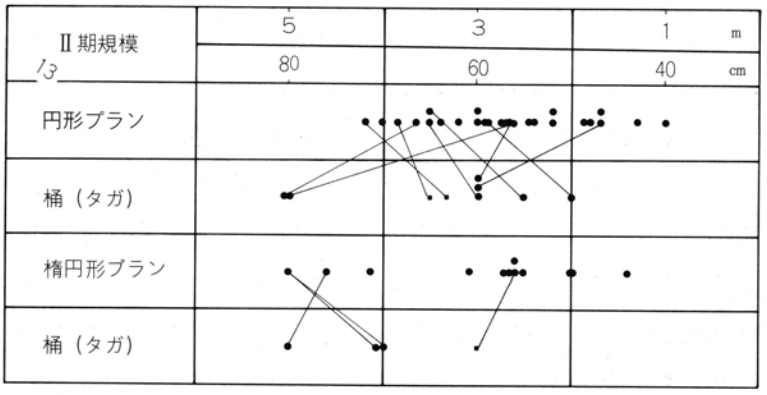
は何れも60～65cmの間にある。Ⅲ期のものについては、タガを検出したものが３基あるのみで、そのうち１基が40cm径であった。また現代井戸として確認された59Ｅ、SK108は上部が土管で下部が桶という内部構造物を持ち、桶が井戸の内部構造として近年まで使用されていたことを想定させる。

次にⅠ期の場合と同様に平面プランについてみると、円形プランを有するものが 30 基（68.2%）楕円形プランを有するものが13基（29.5%）である。円形プランのものは 1.0～4.2m まで直径はまちまちであるが、おおよそ次の３つに分けられる。すなわち 1.0 ～1.85m 径のもの６基（20.0%）、2.2～3.0m 径で2.7m 径を中心としたもの12基（40.0%）3.2～4.2m 径のもの７基（23.3%）である。楕円形プランのものについても以下の３つのグループに分類が可能である。すなわち長軸で1.3～2.0m のもの３基（23.1%）、 2.5 ～3.1m で2.6m を中心としたものが６基（46.2%）、4.15～5.0m のもの４基（30.8%）である。更に桶の規模と平面プランの規模とを総合して類型化すると、Ⅰ類：楕円形の平面プランを持つもの、Ａ．長軸4.0m 以上の大型平面プランで70cm径以上の大型桶を積み上げたもの、Ｂ．長軸３m 以下の平面プランで60cm径前後の中型桶を積み上げたもの、Ⅱ類：

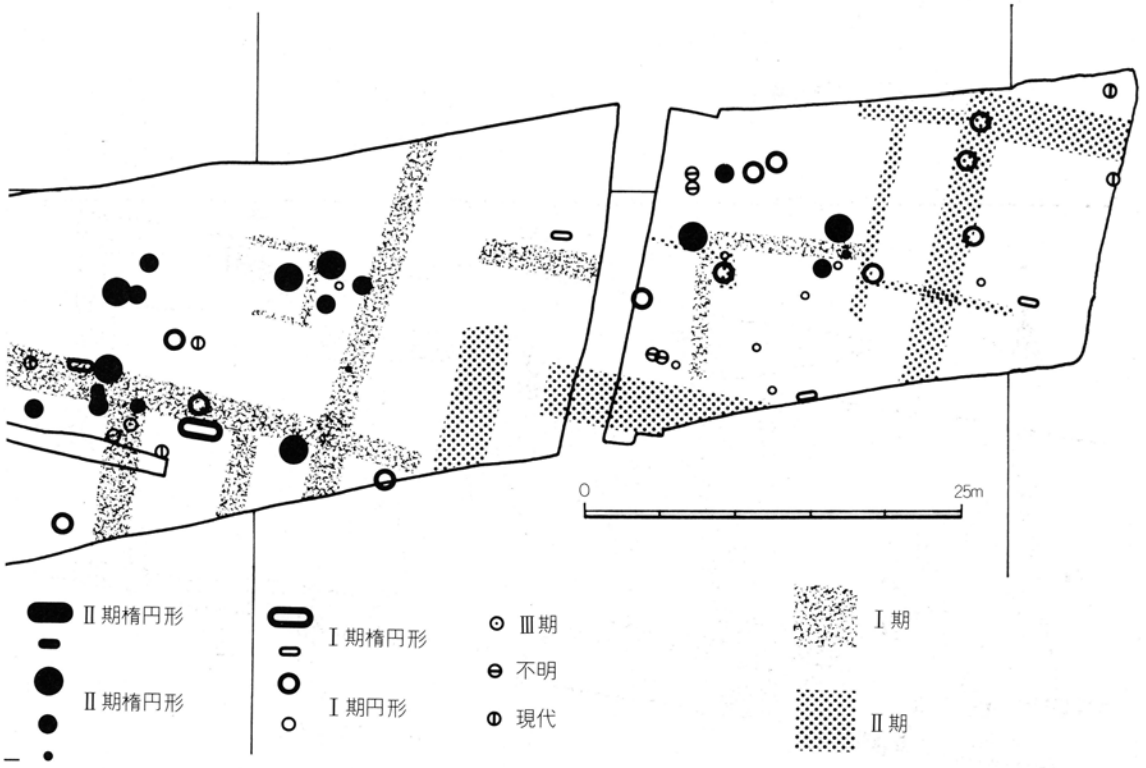
朝日西遺跡の井戸と溝



円形の平面プランを持つもの、A　2.6m 径以上の中型平面プランで80cm径以上の大型桶を持つもの、B　2.6m 径以上の中型平面プランで60cm径～70cm径の中型桶を持つもの、C　2.8m 以上の中型平面プランで50cm径～60cm径の小型桶を持つもの、D　2.0m 以下の小型平面プランで60cm径前後の中型桶を持つもの、に分類できる。



Ⅱ期　井戸規模分布図



4

本稿では井戸の類型を行なったわけであるが、その具体的な時期についての言及は行わず、大まかにⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期という朝日西遺跡の時期区分を適用した。Ⅰ期・Ⅱ期という区分はもちろん出土遺物等によって分けたものであるが、今回の類型から除外した特殊な内部構造物を有するものについて少し触れる必要がある。すなわちⅠ期として取り上げた竹の井戸側と曲物を持つものであり、その出土遺物は山茶椀を主体とするが若干ながら窯窯製品を含み、15世紀代のものと思われる。Ⅱ期として取り上げた半裁竹を方形に組んだものは、窖窯製品が主体であり、上部が木枠で下部が桶のものも15世紀末の遺物が主体となっている。また薄板のみ残存していたⅡ期の井戸も15世紀代のものと考えられ、奇しくも15世紀代、すなわち社会的に中世から近世への転換期に特殊な内部構造物を持ったものが表われる。

内部構造物そのものに関する問題は今回は取り上げなかったが、今後の検討課題となってくるであろう。例えば木枠の組み方による時期差・地域差の問題や曲物が転用されたものか井戸専用に制作されたものか等細かな問題が残っている。さらに井戸と溝との関係も中・近世の屋敷地の様相を知る上で重要な検討課題である。

朝日西遺跡を含めて、尾張低湿地上にある遺跡群は井戸を築造する際に非常に似通った条件下にある。すなわち海抜0m付近に存在する上部砂層(6)にまで掘り下げれば、水質の善し悪しは別として容易に地下水を得ることができることや、近くに石材がなく礫層のように地盤がしっかりせず、非常に軟弱な砂層と泥層の上に立地しているため石材を用いた内部構造物は不向きで、内部構造物はほとんど木材(7)が使用されている等、尾張低湿地という一つの特殊な地理的環境が井戸の様相を規定する大きな要素となっているといえる。また内部構造物が検出されなかったものがかなりの数量を占めるが、これについては尾張低湿地の湧水量を考えると素掘りで放置したものなどは1～2日で崩壊してしまってとても井戸として機能しない。すなわち全ての井戸には何等かの内部構造物があったと考えられる。さらに内部構造物を有するものでも、最下部のみ残存していた例が多いのは、井戸を廃絶する際に何等かの形で廃絶儀礼が行なわれ、その内部構造物を抜き取り、湧水等によって最後まで抜ききれなかったものが残存していたと思われる。換言すれば尾張低湿地で検出される井戸は使用時の破壊と廃絶時の儀礼を経てきたものであると言える。朝日西遺跡では廃絶儀礼の際に投棄されたと思われる墨書土器類の出土はみられなかったが五条川をはさんだ対岸の清洲城下町遺跡や土田遺跡、甚目寺町の阿弥陀寺遺跡等にはかなりみられる。これらのことは、井戸と水に対して人々が畏敬と霊的存在の認識を強く抱いていたことを伺わせ、当地の民間信仰の在り方を考察する上での一つの資料となり得るもので

ある。

ここまで述べてきたように、まだまだ課題は山積みであるが、この小稿が今後尾張低湿地で井戸を発掘調査する場合の一つのマニュアルとなれば幸いである。

Ⅲ期

58				
	SE01			5.3×1.4
59E				
	SK36	カメ	円	3.36×0.96
	36B	タガ	円	1.80×0.93
	36C	タガ(4)	円	2.33×0.67
59F				
	40	タガ	楕円	3.70(3.35)×1.19

現代

57			
	SE001		
	003		
59E			
	108	ドカン＋桶	
$59E_2$			
	07	ドカン	
59F			
	16	ドカン	
	35	ドカン	

不明

60A				
	SK02	タガ	円	2.65×0.67
	03	タガ	楕円	2.00(1.70)×0.60
	05		円	2.20×0.64
	06		円	1.80×0.60

〔注〕

(1) 財団法人愛知県教育サービスセンター『環状２号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』 1984。

(2) 鳥居龍蔵「遺跡と清水湧出地との関係」(『先史及原史時代の上伊那』 1926)

(3) 宇野隆夫「井戸考」(『史林』65－No５ 1982・９)

(4) 山本博は『井戸の研究』1970の中で井戸の部分名称に関して、地上構造を「井桁」、地下構造を「井筒」と呼び、「井桁」を四種類、「井筒」を大きく２型式に分類している。

(5) 長軸から短軸を引いてその値を長軸で割ったものに100をかけたものが10以上であるものを楕円形とした。$\frac{\text{長軸}-\text{短軸}}{\text{長軸}} \times 100 < 10$

(6) 縄文時代前期から中期のころにかけて形成された。井関弘太郎「一宮の地形と地質」(『一宮市史』本文編1977)

(7) 阿弥陀寺遺跡で上部を常滑の大甕の上胴部を使用した例があった。

〔参考文献〕

井関弘太郎「弥生時代以降の環境」(『岩波講座　日本考古学２』 1985)
財団法人愛知県教育サービスセンター『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』 1985
朝日遺跡群調査団『廻間遺跡』 1983
朝日遺跡群調査団『土田遺跡』 1982
朝日遺跡群調査団『土田遺跡Ⅱ』 1983
四柳嘉章「能登の中世荘園村落における信仰―穴水町西川島遺跡の調査から―」(『石川考古学研究会々誌』27 1985)
山本博 (『神秘の水と井戸』 1978)